

『つながっていることの大切さ』 ヨハネ15:5-11

15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。

15:6 人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。

15:7 あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。

15:8 あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。

15:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。

15:10 もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにいるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにいるのと同じである。

15:11 わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである。

●序論

先週振り返り。…まずこの場面の背景をお話ししました。

このぶどうの木のたとえば、イエスさまが十字架にかかれる前日、とらえられる数時間前に、いわゆる最後の晩餐の席上で弟子たちに向けて語られた言葉です。

そしてこのぶどうの木のたとえば話で、イエスさまはご自分をぶどうの木、そしてわたしたちはその枝とあらわし、そこに枝を手入れする農夫が父なる神さまだとお話になりました。

この父なる神さまの関心は、わたしたちがイエスさまにつながっていることにあり、そして豊かに実を実らせることにありました。そのための手入れ（刈り込み）がなされるのだということが語られています。

つまり、枝にたとえられるわたしたちの祝福に、神さまご自身が、とても強い関心を持っておられるということです。そしてこう語られました。

15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。

この状況は、ある意味弟子たちの卒業式のようなものです。彼らの信仰を励まし、その経験を経ての生き方を示しています。

それが「わたしにつながっていないなさい」(：4)という言葉です。

これから迎えるであろう、そのどんな困難の中でも「わたしにつながり続けなさい」

と語っている。それが先週、今日と聞いているイエスさまのたとえの結論です。

●本論

I. 実を結ばないこと

15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。

「イエスさまを離れては実を結ぶことができない」ということ。

イエスさまに結びついていないならば、それがどんな立派にふるまっているようでも、”神さまの目には”、意味のある実を結ぶことができない、ということです。

神の目にかなう実りは、人間的な努力やその成果によらず、ただイエスとつながること、そのイエスさまとの祝福された関係の中でこそ、はじめて結ぶことのできる、救われた者のいのちの実りなのです。

イエスさまは、1節で「わたしはまことのぶどうの木」とわざわざ断りました。

にせものも、自分につごうのよい木もあるでしょう。この世的評価や、力を誇ることもできるでしょう。

けれども、それではこの命の世界に入ることができない、それがイエスさまの言葉の真意です。

15:6 人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。だから、深呼吸して自分が、イエスさまよりも偉くならないこと、先に立たないことを決意しましょう。心へりくだってイエスさまに耳を傾けることです。

イエスさまという”まことの木”にしっかりつながれていることです。そのことに、最大限の関心と心を向ける者でありたいと願います。

II. 実を豊かに結ぶこと

「実を結ぶ」ということについて、

ここでも”木を見て枝を知り、そして実りを見る”ということです。

まことのぶどうの木につながっているからこそ、その実は神さまの目に幸いなものであって、その逆ではないということです。

この「実」とは何か？多くの場合、それはガラテヤ5:22-23にあるものだと言われます。

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。（ガラテヤ5:22-23）

善い人もまた、これに似たような生き方をあらわすことはできます。けれどもそこに違いがあります。

ある時、イエスさまのもとに金持ちの青年がやってきて「善い先生、永遠のいのちを得るためになにをしたらよいでしょうか」と尋ねてきました。

イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになるだろう。そして、わたしに従ってきなさい」。すると、彼はこの言葉を聞いて、顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。たくさんのお金を持っていたからである。(マルコ10:21-22)

いろいろなものと努力と行いで、自分を誇り、主張することができた青年でした。けれども、そのすべてを置いて、まことのいのちの木なるイエスさまにつながることは、できなかった…のです。

今日お読みしたところで、まことの木であるイエスさまが語られています。

15:7-8 あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。

「わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば」とあります。

イエスさまの言葉に耳を傾けつつ始めること、歩むこと。

それは、わたしたちの信仰生活でイエスさまにつながっていることです。

その上で「祈ろうよ」という実りの招きへと導かれるのです。

「…わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(7)

だからイエスさまに結ばれているとき、イエスさまはわたしたちの思いを「祈ること」へと向けてくださり、またそれが応えられること、さらにはその経験を通して、神さまご自身が栄光をうける礼拝の祝福の世界が広げられていくのです。

だから、そこには主の喜びがあります。

Ⅲ. 主の喜びがあること

15:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。

「わたしの愛のうちにいなさい」との招きは、すなわち父の愛、イエスさまの愛の交わりの中に、わたしたちを招いてくださっているということです。

…それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりの

ことである。(1ヨハネ1:3)

だからイエスさまはこうも語られました。

15:10-11 もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである。わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである。

わたしたちは、圧倒的に神さまに愛されています。そしてその愛の中に招かれています。

だからイエスさまは、「わたしの愛のうちになさい」と語られるのです。

農夫にたとえられた父なる神さまも、わたしたちに痛みのもとなう手入れをしてください。そこに愛があります。そうしてわたしたちは時をかけて、豊かな実りを知ることができるようにされるのです。

15:11 わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである。

この言葉は真実です。 だから「わたしにつながっていなさい」「わたしの愛の内になさい」なのです。

最後の晩餐という緊迫した状況で語られたこのたとえは、イエスさまの最後の願いをあらわしたものでした。

残して行く弟子たちが、そしてわたしたちが、ただただイエスさまにつながり続けることで、本物の実りを、豊かに結ぶ人生を送ることができるようにという願いです。

アーメン、わたしたちは、このイエスさまの思いに、素直に応答する者でありたい願います。